

子供の学習障壁を解消し、社会認識を形成する社会科学習の在り方

—第6学年「日本とつながりの深い国々」の実践を通して—

山本 慧一（千葉市立小中台南小学校）

[研修先 千葉大学教育学部]

《研究の概要》

本研究の目的は、学習障壁を解消して社会認識を形成するための学習方法を提案することである。そのため、社会認識形成と学習障壁の関係性を整理した。そして、事実認識（個別の知識・概念的な知識）と価値認識（社会的事象の意味や価値）を獲得する場面での学習障壁の解消方法を立案した。成果として、それぞれの場面での学習障壁の解消により、各国の様子を関連付けた上での文化の多様性の理解や、異文化尊重の重要性の理解という社会認識を形成することができた。課題として、個々の実態に合わせたさらなる支援や工夫が求められる。

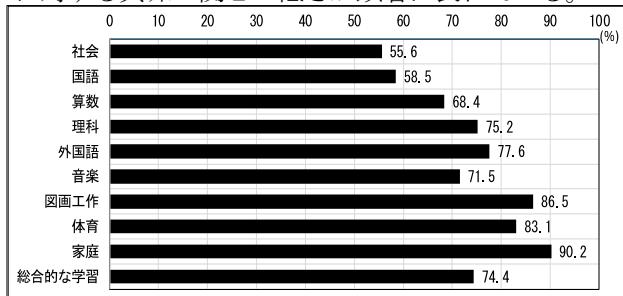
1 問題の所在

「第3次千葉市学校教育推進計画」（千葉市教育委員会 2023）によると、これから社会は予測困難な時代と言われており、答えのない問い合わせにどう立ち向かうのかが問われている。学校教育には、どのような未来を創っていくかを子供たちが主体的に考え、目の前の事象から解決すべき課題を見出し、最適解や納得解を生み出すことができる力を育成することが要請される。

殊に、小学校社会科では、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することを目標とする（文部科学省 2018）。予測困難な時代を生き抜く子供たちにとってその資質・能力の育成は肝要であり、千葉市の学校教育の課題とも一致する。また松尾（2019）は「社会科は『社会認識の形成を通して公民的資質（公民としての資質・能力）を育成する』教科である」と指摘し、山田・田中（2019）は「公民的資質を育てることと社会認識を育てることは相互に補完し合い、統合的に両者を育てることにつながる」としている。そのため、公民としての資質・能力の育成には、社会認識の形成が必要であると考える。

しかし、子供の社会科学習に対する実態から課題が見られる。「第5回学習基本調査」報告書（ベネッセ教育総合研究所 2015）によると、社会科に対する子供の興味・関心が低く、[図1]が示すように社会科学習に肯定的な回答をした子供が55.6%と他教科と比べ最低値である。平成2年実施の第1回調査から、最新調査の平成27年まで最下位であり、社会科

に対する興味・関心の低さが顕著に表れている。



[図1] 「第5回学習基本調査」による教科や活動の「とても好き」「まあ好き」の割合

これから時代、社会認識の形成を通した公民としての資質・能力の育成が求められる。しかし、子供の社会科学習への興味・関心が低く、公民としての資質・能力と社会科学習に対する子供の実態に乖離が見られる。その要因として、社会科学習への苦手意識やつまずきがあるのではないかと考えた。そこで本研究を通して、子供の学習への苦手意識やつまずき（以下「学習障壁」と呼ぶ）を解消し、社会認識を形成して千葉市が目指す「主体的に実社会に関わり、最適解や納得解を生み出す子供」の育成を目指したい。

2 研究の目的と方法

（1）研究の目的

本研究では、社会認識の形成と学習障壁の解消との関係性を整理する。そして、子供の学習障壁を解消し社会認識を形成するための学習方法を立案し、授業実践にて検証する。授業実践の成果と課題を分析し、今後の社会科学習の授業改善の方法を提案する。

（2）研究の方法

①研究主題に関する基礎的研究

小学校社会科における社会認識の形成とは何か、ま

た、社会科学習の中で子供が抱える学習障壁とはどのようなものかを先行研究や実態調査を基に解明する。

②研究の視点と手立ての立案

先行研究の分析と実態調査を基に、どのように学習障壁を解消し、社会認識を形成するかを検討し、学習方法の在り方に関する研究の視点と手立てを立案する。

③検証授業の実践による子供の変容の分析

実践前後の子供への実態調査から、子供の社会認識の形成の実態及び変容を明らかにし、成果と課題を基に今後の社会科学習の授業改善の方法を提案する。

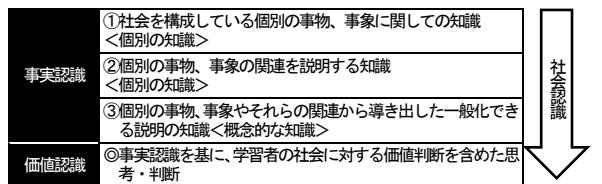
3 研究の内容

(1) 研究主題に関する基礎的研究

①「社会認識の形成」とは

松尾（2019）は社会認識を「社会的事象に対する確かな事実認識を踏まえ、その本質を多面的・多角的に考察し、社会的事象の意味や価値を見出す営み」と定義している。また山田・田中（2019）は「社会認識は、学習者が社会科教育の成果として獲得した知識と知識を獲得するプロセス」であり「事実認識と価値認識」に分けられると述べている（[表1]）。

[表1] 社会認識の構造（山田・田中（2019）を基に筆者作成）



棚橋（2007）は、社会認識の形成を市民的資質の包含関係にある一つの「社会認識力」であると提唱している（[表2]）。現行の学習指導要領の三つの柱の「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」が〔表2〕の「知識」と「知的技能」に、「学びに向かう力、人間性等」が〔表2〕の「態度」に含まれる。

[表2] 社会認識力の構造（棚橋（2007）を基に筆者作成）



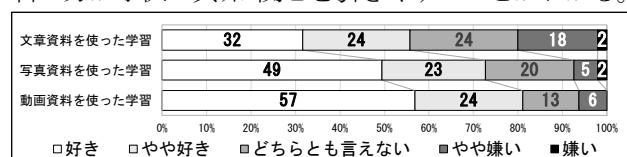
以上のように、共通項を整理した上で本研究では「探究的な態度を伴い、事実認識（個別の知識と概念的な知識）を基に、価値認識（社会的事象の意味や価値）を獲得すること」を社会認識の形成と定義する。

②社会科学習における「学習障壁」とは

社会科学習に対して、子供が苦手意識をもったり、つまずいたり、意欲が低下したりすることを本研究では「学習障壁」と定義し、子供の内面で生じる（生じている）ものと捉える。子供の社会認識の形成を調査した岡田（2015）によると、社会科の授業を受ける子供の社会認識の形成は、皆一様ではなく、授業目標を達成し飛躍していく子供もいれば、つまずいてしまう子供も存在する。これを踏まえ、社会認識の形成の過程でどのような学習障壁が生じると考えられるのか、先行研究や実態調査を基に検討した。

ア 事実認識（個別の知識）における学習障壁

香川（2014）は「児童が社会事象をとらえる際に障害として立ちはだかるのが（中略）視覚的に実感しにくい対象である」と指摘する。また、百瀬（2017）は社会科学習において「『経験不足』は、学習理解においても、様々な困難さの要因にもなりかねない重要な問題の一つ」と指摘する。本市の子供たちの社会科学習の実態を調べるため、所属校の第6学年に、Google Formsを用いたアンケート調査（令和6年6月実施、回答数95名）（以下「子供実態調査」と略す）を行った。その結果、難しいと感じる分野や内容が提示されたときに学習意欲が低下する子供が多いことが明らかとなった。加えて、市内の教員の社会科指導の実態を調査するために、Google Formsを用いたアンケート調査（令和6年8月実施、回答数84名）を行った。調査から、身近な事例から離れたり、教科書内容を一方的に説明したりすると子供の学習意欲が低下すると答えた教員が多いことが明らかとなった。さらに「子供実態調査」での学習教材に関する調査（[図2]）より、写真や動画資料を使った学習に70%以上の子供が肯定的な回答をした一方、文章資料を使った学習では肯定的な回答は50%程度であった。そのため、視覚的な資料の方が子供の興味・関心を引きやすいことがわかる。



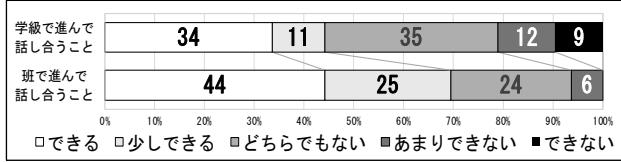
[図2] 提示資料に関する実態調査（n=95）

つまり、事実認識（個別の知識）を獲得する場面で

は、身近な事例や生活経験から離れた内容、理解が難しい内容が含まれたとき、学習障壁が生じると言える。

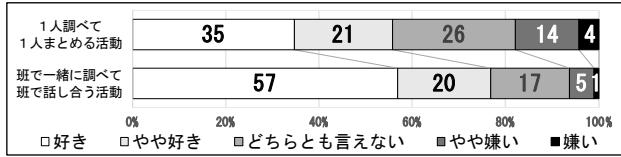
イ 事実認識（概念的な知識）における学習障壁

社会科学習では、事実等の知識を習得し、それらを比較、関連付けなどして考察・構想し、概念等に関する知識を身に付けることが求められている（文部科学省 2018）。筆者の社会科の指導経験を振り返ると、個別の知識を比較、関連付けることに苦手意識を抱く子供は多いと感じている。また、百瀬（2017）は、クラスで話し合い、集団思考する社会科の学習場面において、学習面で困難さを抱えている子供は、過去の上手くいかなかった経験から学習に対する自信を失っていることが多いと指摘する。「子供実態調査」より、班で話し合うことに比べ、学級で話し合うことに困難さを抱える子供が多いことが明らかとなった（[図3]）。



[図3] 話合いに関する実態調査 (n=95)

その理由として、恥ずかしさや緊張、間違いを恐れる気持ち、自信の欠如、発表が苦手であることが主な要因として挙げられた。また、班で一緒に調べて話し合うことより、一人で調べてまとめることに苦手意識をもつ子供が多いことが明らかとなった（[図4]）。すなわち、事実認識（概念的な知識）を獲得する場面においては、比較、関連付けて考察・構想する学習内容と、クラスでの話し合い、個人で解決する学習方法において学習障壁が生じていることがわかる。



[図4] 学習方法に関する実態調査 (n=95)

ウ 価値認識における学習障壁

紙田（2018）は、「事実認識を軽視した結果、価値判断が表層的常識的なものにとどまる」と指摘しており、「抽象的な概念である価値を小学生児童が理解することは難しい」と述べている。事実認識が未獲得、もしくは不十分だと価値認識が獲得できないと考える。

また抽象的な内容に対しての価値認識場面では、子

供の学習障壁が生じてしまう。そのため紙田（2018）は、「教師は、学習指導要領に示された学習内容や地域教材、子どもの実態（発達段階）等を踏まえ、当該単元でどのような価値観を形成すべきか、ねらいを定めて単元開発をする必要がある」と示唆している。

③「社会認識の形成」と「学習障壁の解消」の関係性

社会認識の形成とは、探究的な態度を伴い、事実認識を基盤に、価値認識を獲得することである。これは、公民としての資質・能力を育成する社会科学習の核となる。しかし、社会認識の形成過程には多くの学習障壁が存在し、その形成を妨げている。社会認識の形成と学習障壁の関係性を〔表3〕にまとめた。社会認識の形成は、事実認識を土台とした価値認識の獲得によって達成されるものであり、学習障壁はこのつながりを断ち切る主要な要因となっている。

〔表3〕 社会認識の形成と学習障壁の関係

社会認識の形成	生じる学習障壁
①事実認識（個別の知識）	▲身近な事例や生活経験から離れた内容（理解が難しい内容など）
②事実認識（概念的な知識）	▲個別の知識を比較、関連付け ▲クラスでの話し合い ▲個人で解決
③価値認識	▲事実認識の未獲得 ▲抽象的な内容に対しての価値認識

学習障壁の解消は、社会認識の形成を促す重要な要素である。まず、事実認識（個別の知識）における学習障壁の解消のために、具体的で視覚的な教材を活用し、身近な事例に基づいた指導を行うことが効果的であると考える。その結果、抽象的な内容を子供たちの生活に関連付け、実感を伴った学習となる。これにより、個別の知識が定着し、概念的な知識への橋渡しとすることができるだろう。

概念的な知識の獲得を支援するために、比較や関連付けを明示的に行うとともに、話し合い活動を積極的に取り入れることが求められる。特に「班での調べ学習」など、子供が安心して意見を交換できる環境整備は重要である。このような学びを通して、子供は互いの知識や考え方に関連付け、相互作用を通じて新たな視点を得ることができる。これにより、自身の考えを深めることだけでなく、他者との議論を通じて事実認識（概念的な知識）の獲得へつながるだろう。また、発表への不安を軽減することで、思考力の育成が促進され、社会科における学びの質の向上につながると考えた。

価値認識の獲得における学習障壁を解消するには、

事実認識を基盤とした具体的な内容を提示することが有効である。ここでは紙田(2018)が指摘するように、発達段階や地域性を考慮した教材や単元開発が重要である。例えば、地域の問題を題材にした場合、子供が自分の経験や知識を価値判断に活用することができ、抽象的な概念が具体的な意味をもつようになるだろう。

これらの取組により学習障壁を解消することで、事実認識と価値認識を獲得し、社会認識が形成されると考えた。障壁を解消する過程は、子供たちの学びに対する態度も変革し、主体的で探究的な学習者へと成長する基盤となるだろう。学習障壁を解消し、社会認識を形成することを通して、具体的な事例から社会的事象を理解し、多角的に自分の考えを深め、実社会に対して主体的に関わろうとする子供の育成をねらう。

(2) 検証授業について

学習障壁の解消により、社会認識の形成が促進されることを検証するために、本研究では第6学年の単元「日本とつながりの深い国々」(8時間扱い)を授業実践する([表4])。高学年での国際理解単元は、内容が複雑化・抽象化し学習障壁が生まれやすいと推察した。また、本単元は小学校社会学習の総まとめ・中学校社会学習への橋渡しとして重要であると考え、実践単元として選択した。実践対象は、所属校の第6学年3学級(児童数95名)に定めた。実践期間は令和6年9月~10月とした。本単元で形成すべき社会認識を事実認識(個別の知識と概念的な知識)と価値認識から設定する([表5])。実践後に子供の変容を見取る調査を行う。期間は令和6年10月~11月とした。

[表4]「日本とつながりの深い国々」の指導計画

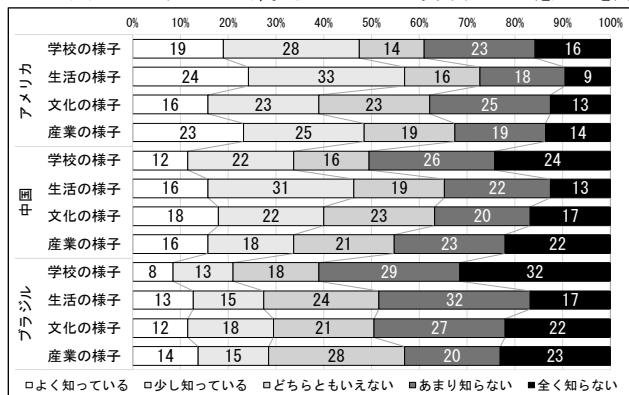
時	学習過程	主な学習活動									
		主な学習活動									
1	オリエンテーション	・「世界がもし100人の国だったら」にかかれた世界の現状を体験する学習を通して、国際社会が抱える問題について考える。 世界には、どのような人々がいて、そこにはどのような問題があるのだろうか。	19	28	14	23	16	11	10	9	8
2	つかむ	・日本と外国のつながりについて話し合う。 ・日本と関係の深そうな国を3つに整理する。 ・3か国の基本情報を整理し、日本とつながりの深い国々について調べてみたいことを話し合い、学習問題を作り、予想を出し合い、学習計画を立てる。	24	33	16	18	9	11	10	9	8
3		日本とつながりの深い国の人々は、どのような生活をしていて、その生活には日本とどのようなつながりがあるのだろうか。	16	23	23	25	13	11	10	9	8
4 ~ 6	調べる	『アメリカ、中国、ブラジルから1か国を選択』 ・学校の様子について調べる。 ・人々の生活や文化について調べる。 ・産業と社会の様子について調べる。	23	25	19	19	14	11	10	9	8
7	まとめる	・学習問題について調べてきたことを話し合う。 ・日本と似ているところと、大きく違うところを表に整理して、話し合う。 ・学習問題について、考えたことをワークシートにまとめる。 日本と経済や文化などで繋がりの深い国の人々の生活は多様であり異なる文化や習慣などを尊重し合うことが大切である。	12	22	16	26	24	11	10	9	8
8	ひろげる	・千葉市国際交流協会や千葉県国際交流センターの活動について調べ、国際交流の役割について考える。	16	22	16	26	24	11	10	9	8

[表5]「日本とつながりの深い国々」で形成する社会認識

社会認識	具体的な内容と知的技能									
	具体的な内容と知的技能									
①事実認識(個別の知識)	・アメリカ、中国、ブラジルの学校生活、生活や文化、産業や社会の様子に関する具体的な知識を得る。	・アメリカ、中国、ブラジルに関する具体的な事実を記述・確認する。	19	28	14	23	16	11	10	9
②事実認識(概念的な知識)	・外国の人々の生活が多様であるという概念的な知識を得る。	・外国の人々の生活の様子と日本との違いを説明する。	24	33	16	18	9	11	10	9
③価値認識	・他国と交流したり、異なる文化や習慣を尊重したりすることの価値を理解する。	・世界の人々と共に生きていくために大切なことを考え、表現する。	16	23	23	25	13	11	10	9

(3) 本単元に関する子供の実態

「子供実態調査」を基に、本実践に関わる国に対する実践前の子供の理解状況について分析した([図5])。



[図5] 各国の様子の理解度調査 (n=95)

調査結果から、子供の各国の様子に対する理解には国や項目ごとに差があることが明らかとなった。特に、アメリカについては、「学校の様子」や「生活の様子」において、一定の理解があると考えられる。しかし、「文化の様子」については、他の項目と比べて知識が乏しい状況である。一方、中国については、「生活の様子」や「文化の様子」に一定の理解があるものの、「学校の様子」や「産業の様子」については理解が浅いことがわかる。さらに、ブラジルに関しては、全般的に知識不足が目立っている。これは、子供たちがブラジルの文化に触れる機会が限られていると考えられる。この実態も踏まえ、学習障壁の解消と社会認識の形成につながる授業改善の方法を立案する。

(3) 研究主題を解明するための視点と手立て

①事実認識(個別の知識)における学習障壁の解消

「子供実態調査」より、社会的事象を身近なものとして捉えることで社会科学習に対して興味・関心が高まることが明らかとなった。しかし、物理的・精神的に距離が離れている教材内容は、社会的事象を身近に感じにくい傾向がある。そのため、子供に社会的事象を身近に捉えさせる導入として、生活経験に関連性があり、疑問や驚きをもてる教材を提示する。子供にと

って外国の事例や国際問題は実感をもって捉えにくい。そのため、オリエンテーションでは、『ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら(第6版)』(以下、『100 人の村』と略す)を用いた体験活動を行う。教室内を小さな世界の縮図にし、識字能力や貧富の差を疑似体験することで、世界には様々な人が住んでおり、そこには人口の偏りや貧困などの課題が存在することに気付くようになる。その手立てにより「身近な事例や生活経験から離れた内容」の学習障壁を解消する。

また、内容理解の困難さという学習障壁を解消するために、教科書内容の一方的な教授ではなく、学習指導要領や他の教科書と比較した上で単元構成の工夫を行う。千葉県内で採用されている3社の教科書の内容を比較すると、[表6]の通り各社4か国を扱っている。

[表6] 各社会科教科書の国際理解単元の扱い

教科書	掲載国	調べる主な観点
東京書籍 『新編新しい社会 6政治・国際編』	アメリカ	小学生の生活、生活や年中行事、産業や社会
	中国	人々の生活や学校生活、文化や行事、生活の変化
	フランス	学校生活、暮らし、産業
日本文教出版 『小学社会6』	ブラジル	小学生の生活、人々の生活、産業
	アメリカ	貿易や日本とのつながり、学校生活や文化
	中国	貿易や日本とのつながり、学校生活や文化
	フランス	日本とのつながり、学校生活や文化
教育出版 『小学社会6』	韓国	貿易や日本とのつながり、学校生活や文化
	アメリカ	文化や日本とのつながり、産業と貿易、人々の暮らし
	中国	貿易や日本とのつながり、歴史、人々の暮らし
	フランス	日本とのつながり、文化、人々の暮らし
	カナダ	貿易や日本とのつながり、文化、人々の暮らし

一方で、『小学校学習指導要領解説社会編』の「グローバル化する世界と日本の役割」における学習内容の取り扱いでは、「我が国と経済や文化などの面でつながりの深い国から、教師が3か国程度を取り上げ」と明記されている。本単元の目標は、調べた国の人々の生活の違いなどから、文化や習慣の多様性について理解することである。そのため、本実践では日本とのつながりを考え、アメリカ、中国、ブラジルの3か国に精選する。そして、自分で調べる国や学び方を決め、学びが共有できる環境を構築するためにICT機器を活用する。本実践では、グループで教え合い、学び合いながら調べたことを整理する。その際、SKYMENUの「ライブ提出箱」の機能を用いて、お互いに調べたことを瞬時に共有し合いながら学習を進める。単元構成と学習環境の工夫により、内容理解の困難さという学習障壁を解消する。

②事実認識（概念的な知識）における学習障壁の解消

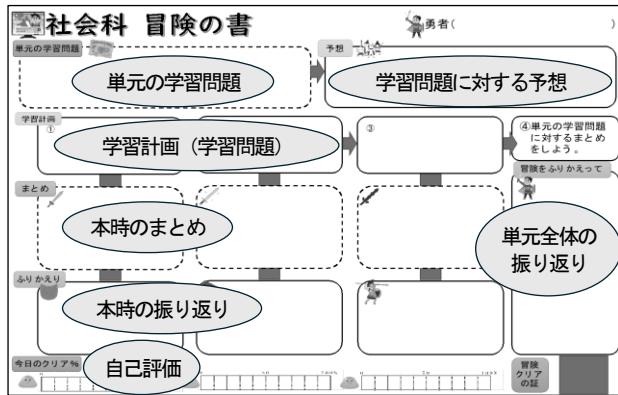
[表6]を見ると、各国で異なる観点で調べる過程が設定されている。しかし、まとめる過程で子供たち

が調べた国の人々の生活を発表し合うときに、調べた観点が異なると比較・関連付けしにくいことが予想される。そこで、教科書を比較し、調べる観点を整理し、「学校生活」「生活や文化」「産業や社会」を調べる活動を設定する。調べた国を共有する際の視点を明確にでき、つまづきなく文化や習慣の多様性に理解できるだろう。

また「子供実態調査」より、話合いなどで発言したり意見を受容したりすることを苦手としている子供が多いことが明らかとなった。そこで、まとめる過程で異なる国を調べた子供同士でグループを作り、プレゼンテーション機能を用いて発表し合う。学びの共有を大切にし、子供たちが自ら調べ、発表する場を設定する。以上の単元構成と学習環境の工夫により「比較・関連付けしにくいという困難さ」や「集団での話合い活動の困難さ」という学習障壁を解消すると考えた。

③価値認識における学習障壁の解消

確かな事実認識が獲得できていないと、価値認識は獲得できない（紙田 2018）。一方で、一週間以上に及ぶ問題解決的な学習において、学習への興味・関心の持続や事実認識の定着にも困難さがあると考える。そのため、獲得した事実認識や自分の考えの変容（の過程）を可視化できるようワークシートの工夫を行う。本実践では、学習問題、予想、学習計画、まとめ、振り返りを1枚のワークシート（[資料1]）に記入する。事実認識や自己の考察を可視化することで、つかむ過程や調べる過程で獲得した事実認識を基に価値認識を獲得しやすくなるだろう。学習の蓄積の可視化により、問題解決的な学習の興味・関心や事実認識の定着が持続し「学習への興味・関心の持続や事実認識の定着に対する困難さ」という学習障壁が解消すると考えた。



[資料1] 本実践で使用したワークシート

また、抽象的な学習内容に対する子供の価値認識の獲得にも困難さがある（紙田 2018）。そのため、具体的な事例を提示し価値認識を獲得する学習を取り入れる。本実践では、ひろげる過程において、千葉市国際交流協会や千葉県国際交流センターの事例を取り上げる。身近な地域でも国際交流が行われていることに気付き、国際交流や異文化理解の大切さを理解することができるようになりたい。その手立てにより「抽象的な内容での価値認識」という学習障壁が解消すると考えた。

（4）検証授業の分析・考察

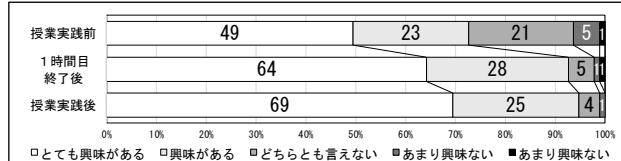
①事実認識（個別の知識）における学習障壁の解消

子供の身近な事例や生活経験から離れた国際理解という内容に関する学習障壁を解消するため、導入で『100人の村』のワークショップを行った（[表7]）。

[表7] ワークショップの具体的な学習内容と子供の反応

学習内容	子供の気付き・反応
①世界の人口数について知り、各々に配された役割カードを参考に、大陸ごとのグループに分かれる。	・アジアの人口は世界人口の60%だ。 ・世界の人口の多くがユーラシア大陸に集中している。
②アラビア語で「バスヌホス」と書かれた紙を見る。役割カードを参考に文字が読める人は指示に従う。	・全員が起立できないということは、文字が読めない人が世界にはいるんだ。 ・世界に「文字で読めない人が20%もいるなんて知らなかつた。
③役割カードの記号に従って、富の多い順に5つのグループに分かれる。各グループ分の模型のお金を渡し、グループ全員に行き渡るように配分する。	・僕の（富が1番多い）グループは、1人にたくさんのお金が配分できた。 ・私の（富が1番少ない）グループは、全員に配ることできなかつた。 ・世界全体で富の配分が不公平だ。
④「世界がもし100人の村だったら」のメッセージを読む。	・世界には、文字が読めない人や貧富の差以外にもたくさんの課題がある。

授業実践前後の子供の変容（[図6]）を見ると、世界の国々を調べる学習に興味をもつ子供が多くなり、その学習意欲が単元終了まで持続したことがわかる。



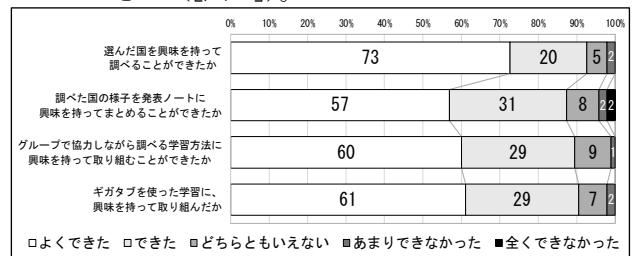
[図6] 世界の国々を調べる学習に対する興味・関心の変容 (n=95)

また、オリエンテーション後の振り返りの記述（[表8]）から、世界では貧富の差が激しいことや不平等であること、日本とは状況が大きく異なる国が存在するなど様々な課題があることについて、多くの子供が事実認識（個別の知識）を獲得することができた。

[表8] オリエンテーション後の振り返り記述の分析 (n=95)

内容の分類（人数）	振り返り記述 [部分的に抜粋]
貧富や不平等への気付き (44)	私は安全で豊かな暮らしをしているが、世界には食べ物を食べられない人々がいることがわかつた。
世界の様々な課題の理解 (25)	世界では自分の知らないところでいろいろな問題が起きている。今まで自分が問題を知ろうとしなかつたのが不思議でした。
世界の人々についての疑問 (9)	世界の人々の生活を知りたいと思った。
様々な人々の存在の理解 (7)	世界には様々な人がいることがわかつた。
人口密度の違いへの気付き (4)	世界の人口には偏りがある。アジアの人口密度が高いことがわかつた。
その他 (6)	

さらに、単元構成を工夫して、調べる国を3か国に精選し、自分で国を選んで調べる活動を行った。一人一台端末タブレットPCを使って資料を集めたり調べたりした。多くの子供が世界の国々を調べる学習に興味をもって取り組むことができた。また、SKYMENUの「ライブ提出箱」の機能を有効に活用しながら、グループで教え合いながら調べる活動に主体的に取り組むことができた（[図7]）。



[図7] 実践後のグループ学習などに対する興味・関心 (n=95)

調べる活動を通じて、子供たちはアメリカ、中国、ブラジルに関する事実認識（個別の知識）を一定程度獲得することができた（[表9]）。まず、アメリカについては、生活文化や社会構造に基づいた具体的な事実を理解していることがわかる。また、移民や多文化共生についても理解しており、異文化理解の素地が形成されている。中国については、社会の仕組みに関する具体的な事実の理解が見られる。これらは、中国の歴史的背景や現在の経済的影響力を理解するための基盤となる知識である。ブラジルについては、農業生産や日系移民の多さといった具体的な事実を記述し、日本とブラジルの経済的・文化的なつながりについて理解していることがわかる。以上のことから、子供たちはそれぞれの国について、生活、文化、産業などの観点から事実認識（個別の知識）を獲得できたと言える。

[表9] 調べる過程での主な子供の記述

国	観点	主な子供の記述【誤字・脱字、漢字表記は筆者が修正】
アメリカ	学校の様子	日本と違い、学校は9月に始まります。自転車やスクールバスで通います。民族や文化が違う子供たちが学んでいます。
	生活・文化	・国土が広いため車で移動する人が多く、無料の高速道路や大きな駐車場があります。 ・ハロウィンやクリスマス、感謝祭などのイベントがあります。
	産業・社会	・大型機械を使って農場で同じ作物を栽培します。 ・移民が多いため、異なる文化をもつ人々と共に生きていくための理解や協力が必要になっています。
中国	学校の様子	日本の小学校は給食があるけれど、中国は自分の家でご飯を食べます。最近は英語やコンピューターの授業が重視されています。
	生活・文化	・北京などの大きな街では高層ビルや高層住宅が建っています。また、歴史を感じる古い建物が残っていて、日本と似ています。
	産業・社会	・経済特区を中心とした企業が多く進出しています。日本は中国に機械類を40%以上輸出している、日本は中国から機械類を50%輸入しています。
ブラジル	学校の様子	・ブラジルでは、新学期が2月から始まります。授業が午前と午後に分かれています。教科ごとに違う先生が教えています。
	生活・文化	・ブラジルの街で働いている日系人が多い。東洋人街と呼ばれていて、和菓子屋や日本料理店など様々な店が並んでいます。
	産業・社会	・ブラジルでは、コーヒー豆や鉄鉱石、サトウキビの生産がさかんで、日本への輸出が多くなっています。

②事実認識（概念的な知識）における学習障壁の解消

「比較・関連付けしにくいという困難さ」や「集団での話合い活動の困難さ」という学習障壁の解消を目指して単元構成と学習環境の工夫を行った。本実践では、日本とつながりの深い3か国を調べ、その内容を共有する学習活動を行った。その際、一人一台端末タブレットPCで作成した「発表ノート」をプレゼンテーション機能で共有した。まとめる過程において、子供が学習問題に対するまとめを書いた記述をループリック評価（[表 10]）した。事実認識（概念的な知識）が獲得できた子供（評価2・3）が二観点とも80%を超え、手立てが有効であったと言える（[図8]）。

[表 10] まとめる過程のループリック評価の基準

評価規準			
観点	評価基準		
	3	2	1
知識・技能	日本とつながりの深い国の人々の生活の多様性や文化の違いを理解し、異なる文化を尊重することの大切さを発表ノートにまとめている。	日本とつながりの深い国の人々の生活の多様性や文化の違いを理解し、発表ノートにまとめている。	日本と他国の生活の多様性や文化の違いについての理解が不十分で、発表ノートにも十分に反映されていない。
	外図の人々の生活の様子と日本の生活や習慣との違いや異なる文化や習慣を尊重する重要性について考え、適切に表現している。	外図の人々の生活の様子と日本の生活や習慣との違いについて考え、自分の言葉で表現している。	外図の人々の生活の様子と日本の生活や習慣との違いについて考え、表現が不十分で、学習内容との関連性が薄い。
知識・技能	45	48	6
思考・判断・表現	59	34	7
□評価3 ■評価2 ▨評価1			

[図8] まとめる過程のループリック評価 (n=95)

さらに、まとめる過程で見られた記述（[表 11]）から、多くの子供が事実認識（概念的な知識）を獲得したことがわかる。各国の多様性と共通性を比較し、そこから文化や生活における多様な視点を導き出している。また、具体的な事実（個別の知識）を基に、各国の特徴を関連付けた上で、文化の多様性という概念を理解している。

[表 11] まとめる過程での主な子供の記述

内容の分類	主な子供の記述【誤字・脱字、漢字表記は筆者が修正】
文化や習慣の多様性の理解	<ul style="list-style-type: none"> 日本とつながりの深い国には、日本と違うところがたくさんあるけれど、似ているところもたくさんあった。 3つの国を比べると、学校の制度がそれぞれ異なり、国によってさかんな農業も違い、生活にも影響している。それぞれの国の文化や伝統を大切にしていて、暮らす場所によって工夫をしている。 それぞれの国で、伝統的な産業・料理・衣装など、いろいろ違った文化が存在している。
他国の文化や伝統を尊重	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの国の文化も大切だが、他国の文化も尊重してお互いの文化を交流して他国の文化を体験することが大切だと思った。 住んでいる環境が異なると、異なる文化が生まれると思ったので、それぞれの文化を尊重することが大切だ。 これからもお互いの文化を大切にしてもっと深く関わっていけたらいいと思う。 お互いの国の文化・伝統・生活を尊重して、他の国との結びつきをより深めていくことが大切だと思う。 違う人種の人々がたくさん住んでいるから、もっと異なる文化をもった人々と共に生きていくための協力が必要だとわかった。

また、異文化を理解することと尊重することの大切さを言及している記述もある。これらの記述は、具体的な事実から一般化された知識や視点を形成する、概念的な知識の習得を裏付けている。

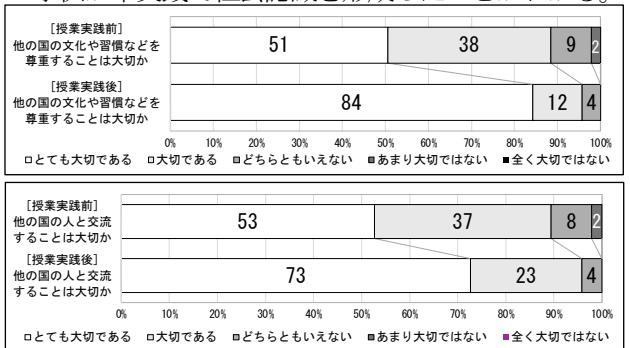
③価値認識における学習障壁の解消

確かな事実認識を基に価値認識を行う上で、学習への興味・関心の持続や事実認識の定着の困難さを解消が行われたか、ワークシートの記述を基に分析した。毎時間の振り返りを積み重ねることで、追究意欲が持続し、事実認識を定着させることができた（[表 12]）。

[表 12] 調べる過程での抽出児のワークシート記述

抽出児と選択した国	調べた観点	ワークシート記述	
		【部分的に抜粋、誤字・脱字、漢字表記は筆者が修正】	
抽出児A [アメリカ]	学校生活	アメリカの学校ではバスで行く人がいて、文化が違う人たちが通うことがありました。次の学習もたくさん調べたいです。	
	生活や文化	日本とアメリカでは、食べる物や文化などが違いました。写真を見てわかったことを書きました。次は文章を読んで詳しく調べたいです。	
	産業や社会	様々な産業が盛んで、日本との貿易も盛んでした。写真や文章を読んで、わかりやすくまとめました。	
抽出児B [中国]	学校生活	学校は日本より早い7時過ぎに登校で、放課後は卓球をやることが多いから卓球の選手は強いんだと思いました。	
	生活や文化	中国は北京のようなところばかりだと思っていたけれど、フーフンのような歴史を感じられるところがあるのを初めて知って驚きました。	
	産業や社会	中国も日本と同じような産業を行っていることを初めて知ったので驚きました。中国はたくさん輸出していて自分の服にも中国製と書いてありました。	
抽出児C [ブラジル]	学校生活	私はたくさん調べた中で、学校での自分の席が決められていない事に一番驚きました。	
	生活や文化	私は、ブラジルと日本はそんなに関わりがないと思っていましたが、深い関わりがあって驚きました。	
	産業や社会	私は、ブラジルでコーヒー豆の生産がさかんなのは知らなかったので、知ることができよかったです。	

また、本実践では「抽象的な内容に対しての価値認識」という学習障壁を解消するために、千葉市国際交流協会や千葉県国際交流センターの事例を取り上げた。地元で国際交流を行っていることを知り、異文化理解についてより身近な存在であることに気付くことができた。国の文化や習慣、国際交流の重要性の理解など、価値認識を獲得した子供が増えた（[図9]）。さらに、単元の終末には他国の文化や習慣の多様性の理解や尊重という価値認識の獲得が見られた（[表 13]）。多くの子供が本実践で社会認識を形成したことがわかる。

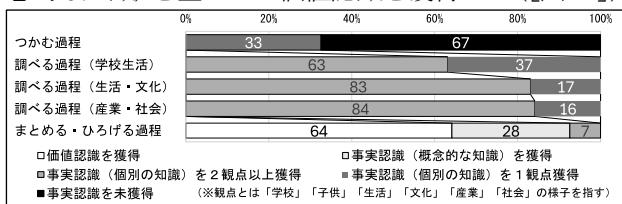


[表13] 本単元終末での振り返り記述 (n=95)

内容の分類 (人数)	振り返り記述【部分的に抜粋】
他国の文化や伝統を尊重 (34)	違う文化を持った人と生きていくためにはその国の文化や生活を理解して尊重することが必要になってくると思う。
文化や習慣の多様性の理解 (28)	それぞれの国の学校での生活、その国人達の生活、文化、伝統などが違うことがわかりました。
各国の生活や文化を理解 (17)	発表を聞いて、自分の知らなかったことやその国の魅力を知ることができました。
国際交流を大切にしたい (8)	お互いの文化を尊重し国際交流を深めることが大切だと思う。
世界の課題を解決したい (2)	この学習をきっかけに、世界をもっとよくしていきたいなと思った。
その他 (6)	

4 研究のまとめ

本研究では、第6学年の国際理解単元において学習障壁を解消し、社会認識を形成する授業を実践した。授業を通して、多くの子供が事実認識（個別および概念的な知識）を基にして価値認識を獲得した（[図10]）。



[図10] 本実践における子供の社会認識形成の変容 (n=95)

具体的には、導入の工夫により、子供は貧富の差、不公平などの実態を具体的に捉え、学習への動機付けができた。世界の国々を調べる学習に対する興味・関心が単元を通じて持続したことが明らかとなった。

また、学習内容の精選と学習環境の工夫によって、3か国の学校生活や文化、産業といった具体的な事実について積極的に調べ、事実認識（個別の知識）を獲得する姿が見られた。さらに、ICT機器を活用したグループ学習では、共有機能を通じて調べたことを即時に伝え合い、異なる国についての情報を比較・関連付けて学ぶ姿が見られた。これにより、各国の特徴を関連付けた上で、文化の多様性という概念の理解であ

る事実認識（概念的な知識）の獲得も進み、異文化理解の基盤が形成された。

さらに、価値認識の獲得においても成果が見られた。獲得した事実認識や自分の考えの変容（の過程）を可視化できるようにワークシートを工夫したこと及び身近な事例を取り上げたことで、子供は地域社会と世界とのつながりを具体的に捉え、国際交流や異文化尊重の重要性を理解した。「文化や習慣の多様性の理解」や「他国の文化や伝統の尊重」が振り返りの記述に多く、単元を通して社会認識が形成されたことが示された。

一方で、課題も明らかになった。学習意欲の持続や学習内容の定着には個人差があり、全ての子供が等しく成果を得られたわけではなかった。一部の子供において、調べる活動や発表活動に苦手意識を抱え続けたことが確認された。千葉市が目指す「誰一人取り残さない教育」を念頭に、個別支援や学びの進捗に応じた段階的な支援が必要である。また、抽象的な価値認識の獲得において、さらに具体的な事例を取り入れる必要がある。例えば、実際に国際交流活動を行う人物の講話やオンライン交流を活用する工夫が考えられる。

本研究を通じて社会認識の形成に向けた学習障壁の具体及びその解消の手立てを提示することができた。この成果と課題を踏まえ、全ての子供が主体的に学び、社会認識を深められる環境を構築し、千葉市が目指す「主体的に社会に関わり、最適解や納得解を生み出せる子供の育成」を目指したい。今後も子供一人一人が社会認識を形成できる授業づくりを模索し、日々の実践を通じて社会科教育の可能性を広げていきたい。

【主な引用／参考文献等】

- 千葉市教育委員会（2023）「第3次千葉市学校教育推進計画」
- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』日本文教出版
- ペネッセ教育総合研究所（2015）『第5回学習基本調査』報告書
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail11.php?id=4862> (2024.5.21参照)
- 松尾貴史（2019）「科学的社会認識形成を目指す中学校社会科学週の実践研究—社会的構成主義に基づく『ずれ』に着目して—」『福音岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）年報』第9号. 189-190
- 山田均、田中雅代（2019）「社会的な見方・考え方を働かせる学びは社会認識を育む」『奈良学園大学紀要』第11号. 159-170
- 棚橋健治（2007）『社会科の授業診断—よい授業に潜む危うさ研究』明治図書出版
- 岡田了祐（2015）「事実的社会認識形成型社会科における動機づけによる知識の獲得と再現—構築型評価モデルによる子どもの社会認識形成過程の比較考察—」『中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル』第16号. 1-10
- 香川貴志（2014）「小学校社会科における苦手意識はどのあたりで芽生えるのか?—データをもとにした授業改善に向けてのヒント—」『京都教育大学紀要』第124号. 13-27
- 百瀬和夫（2017）「特別支援教育の知見をいかした学校経営VI—社会科の学習に特別支援の知見をいかす視点と手立て—」『教育総合研究叢書』第10号. 73-81
- 紙田路子（2018）「小学校社会科授業における価値判断の分析対象—多面的な価値判断基準の育成をめざして—」『日本教科教育学会誌』第41巻 第2号. 41-50
- 開発教育協会（2020）『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら<第6版>』開発教育協会